

文学論文における思考動詞の使用状況 —医学・農学・工学論文における使用状況との比較を通して—

向坂卓也（中国・外交学院）†

The Usage of Cognitive Verbs in Literary Papers - A Comparison with Medical, Agricultural, and Engineering Papers-

Takuya Mukozaka (China Foreign Affairs University)

要旨

本研究では J-stage 収録の文学論文における「思う」「思われる」「考える」「考えられる」について、医学・農学・工学論文との比較を通して考察する。アカデミック・ライティング教育では 4 つの思考動詞のうち、客観的な根拠に基づき著者が判断する「考えられる」が推奨されている。しかし、論文（直接引用部分は除外）における使用状況を調査したところ、医学・農学・工学論文では「考えられる」が多用され、文学論文では「考える」が多用されていることが分かった。実験データ等の客観的な数値に基づき著者が判断を行う医学・農学・工学研究では著者の思考を表す際に「考えられる」が主として使用されている。一方、文学作品の解釈・批評を行う文学研究では著者の主観が反映されることがあり、「考える」が多用され、「考えられる」「思われる」も使用されている。また作品の人物や著者の思考を表す際に「思う」「考える」が使用されている。

1. はじめに

アカデミック・ライティング教育においては、論文著者の思考を表す表現として「考えられる」は客観的な根拠を示したうえで結論を述べる表現であるため論文において推奨されている。

しかし、向坂（2019）、向坂（2023）で主観的であるためアカデミック・ライティング教育では推奨されない「だから」について、実験データ等の客観的な数値を基に結論付けを行う理系論文では使用が稀だが、文系論文では分野によっては著者の主観が入り込む余地があるため使用されると分析したように、客観性が要求されるかどうかは研究方法によって違いが表れてくると考えられる。そして、文系論文の中でも文学分野では「だから」の使用が多く、文学論文は他の分野とは異なった文体的特徴を有していると考えようになっただが、このことは思考動詞の使用についても言えるのではないだろうか。

学術論文における思考動詞の使用状況を調査した先行研究として、工学系論文を調査した佐藤・仁科（1997）、日本史学論文を調査した杉田（1997）、日本語学論文を調査した川端（2013）があるが、文学論文でどのような思考動詞が使用されているのかについて論じた論文は管見の知る限り見当たらない。

そこで本研究では文学論文における「思う」、「思われる＋思える」（以下、「思われる等」）「考える」、「考えられる＋考えることができる／考えることが可能である／考え得る」（以下、「考えられる等」）について、医学・農学・工学論文との比較を通して考察する。文学作品の解釈や批評を行う文学研究と実験データ等の数値に基づいて分析を行う医学・農学・工学研究とで研究方法が異なる。研究方法において文学研究とは対照的

† xiangban_zhuoye[at]yahoo.co.jp

な医学・農学・工学研究の論文との比較を通して考察していく。

2. アカデミック・ライティング教育における思考動詞の取り扱い

『論文・レポートの基本』（石黒 2012）では、「思われる」「考えられる」「見られる」「言える」等の思考・伝達動詞の自発・可能形は、「論理的に考えてそう解釈するのが自然であることを示すのに適した表現」であり、「データからの推論を示す表現」としてふさわしいとしている（p.116）。そして石黒（2012）は、「思う」「考える」「見える」「言う」という基本形は主語に「私」が想定でき、「私がやったらうまくいくけれども、ほかの人がやったらうまくいかない」ので客観的ではなく、客観性とは「誰がやっても同じ結果になること」で満たされるとしている。そして「私には~思われる」は私の独自性を出しながら、同時に私の存在を消す表現であると述べている（p.117）。

『レポート・論文を書くための日本語文法』（小森・三井 2016）では、「考える」は序論や結論で書き手の立場を明確にする場合に使い、「考えられる／言える」「思われる」は調査資料などから導き出された表現であると述べている（p.117）。「と思われる」は「やや主観的に述べる」際の表現であり、「考えられる／言える」ほど客観性は高くないので、明確に述べたいときは使わないとしている（p.118）。

『日本語を学ぶ人のためのアカデミック・ライティング講座』（伊集院・高野 2020）では「と思う」は「個人的・直感的・情緒的な考え」を表すため、アカデミック・ライティングでは「あまり使わないようにしましょう」と推奨していないが、「と考える」は「分析的な印象を与える」ため、よく使われると述べている（p.53）。一方で「と思われる／と考えられる」は「いろいろな状況からそう思う/考えるのが自然だ（必然的にそのような結果になる）」という自発の意味になり、少し客観性が加わるとし、さらに「と考えることができる」という「可能」の意味も表すことができるため、「と思われる」よりも広く使われるとしている（p.54）。

以上のようにアカデミック・ライティング教育では論文・レポートに使用される思考動詞として「考えられる」は推奨される表現であり、「思われる」「考える」は使われることもある表現であり、「思う」はあまり推奨されない表現であるとされている。

3. 文学論文と医学・農学・工学論文における思考動詞の使用状況の調査

3.1 調査方法

本研究では以下の方法で文学論文と医学・農学・工学論文における思考動詞「思う」「思われる等」「考える」「考えられる等」の使用状況を調査する。

- ①J-stage（国立研究開発法人科学技術振興機構が運営する学術論文の電子公開システム）に収録されている学会誌における著者が異なる各 50 本の学術論文を対象とする。
- ②文学論文として中世文学会『中世文学』（古典日本文学が研究対象）、昭和文学会『昭和文学研究』（現代日本文学が研究対象）を調査対象とする。医学論文として日本内科学会『日本内科学会雑誌』、農学論文として日本農芸化学会『化学と生物』、工学論文として日本鉄鋼協会『鉄と鋼』を調査対象とする。
- ③著者が特定できる論文を対象とし、著者が特定できない共著論文は除外する。
- ④J-Stage に収録されている学術論文は pdf ファイルをダウンロードし、pdf の検索機能を使い、順接接続詞を検索する。pdf ファイルを word 化し、word の文字カウント機能により文字数を計数する。

- ⑤敬体が使用されているものは除外する。
- ⑥直接引用の部分は調査対象から除外する。
- ⑦思考動詞の思考主体別に「論文著者」「引用文献の人物・著者」の2つに分類する。
- ⑧「思われる」「考えられる」は可能・自発の用法を集計し、受身の用法（「れている」「れていた」「れてきた」等）を除外する。
- ⑨学会誌ごとの使用件数を計数し、さらに10万字あたりの使用件数を算出する。

3.2 調査結果

表1では文学論文と医学・農学・工学論文における思考動詞「思う」「思われる等」「考える」「考えられる等」の使用件数を思考動詞の主体別に「論文著者」「引用文献の人物・著者」の2つに分けて表示している。

表1 文学論文と医学・農学・工学論文における思考動詞の使用件数

論文雑誌	字数		思う	思われる等	考える	考えられる等	論文雑誌	字数		思う	思われる等	考える	考えられる等
『中世文学』(文学・古典日本文学)	608,627	総数	40	136	258	238	『日本内科学会雑誌』(医学)	648,009	総数	7	21	53	111
		論文著者	20	136	229	234			論文著者	7	21	49	111
		文献人物著者	20	0	29	4			文献人物著者	0	0	4	0
『昭和文学研究』(文学・現代日本文学)	922,708	総数	54	120	195	88	『化学と生物』(農学)	669,704	総数	22	30	125	145
		論文著者	12	112	126	86			論文著者	18	29	122	145
		文献人物著者	42	8	69	2			文献人物著者	4	1	3	0
文学論文合計	1,531,335	総数	94	256	453	326	『鉄と鋼』(工学)	909,423	総数	6	59	169	251
		論文著者	32	248	355	320			論文著者	6	59	152	251
		文献人物著者	62	8	98	6			文献人物著者	0	0	17	0
							医学・農学・工学論文合計	2,227,136	総数	35	110	347	507
									論文著者	31	109	323	507
									文献人物著者	4	1	24	0

文学論文と医学・農学・工学論文における思考動詞の使用件数を10万字当たりの使用件数を算出し、表示したものが表2である。本研究では論文ごとに使用状況を比較するため、10万字当たりの使用件数を用いて考察を行う。

表2 文学論文と医学・農学・工学論文における思考動詞の使用件数(10万字当たり)

論文雑誌		思う	思われる等	考える	考えられる等	論文雑誌		思う	思われる等	考える	考えられる等	
『中世文学』(文学・古典日本文学)	総数	6.6	22.3	42.4	39.1	『日本内科学会雑誌』(医学)	総数	1.1	3.2	8.2	17.1	
	論文著者	3.3	22.3	37.6	38.4		論文著者	1.1	3.2	7.6	17.1	
	文献人物著者	3.3	0.0	4.8	0.7		文献人物著者	0.0	0.0	0.6	0.0	
『昭和文学研究』(文学・現代日本文学)	総数	5.9	13.0	21.1	9.5	『化学と生物』(農学)	総数	3.3	4.5	18.7	21.7	
	論文著者	1.3	12.1	13.7	9.3		論文著者	2.7	4.3	18.2	21.7	
	文献人物著者	4.6	0.9	7.5	0.2		文献人物著者	0.6	0.1	0.4	0.0	
文学論文合計	総数	6.1	16.7	29.6	21.3	『鉄と鋼』(工学)	総数	0.7	6.5	18.6	27.6	
	論文著者	2.1	16.2	23.2	20.9		論文著者	0.7	6.5	16.7	27.6	
	文献人物著者	4.0	0.5	6.4	0.4		文献人物著者	0.0	0.0	1.9	0.0	
							医学・農学・工学論文合計	総数	1.6	4.9	15.6	22.8
								論文著者	1.4	4.9	14.5	22.8
								文献人物著者	0.2	0.0	1.1	0.0

4. 論文著者の思考を表す思考動詞の使用状況

4.1. 「考える」と「考えられる」

表 2 で見るように、論文著者の思考を表す表現として最も多いものが文学論文では「考える」の 23.1 件であるのに対し、医学・工学・農学論文では「考えられる等」の 22.8 件である。

佐藤・仁科(1997)は「と考える」は判断の根拠¹がない場合の判断表現として使用するのが適当(○)だが、根拠がある場合でも使用可能(△)であり、一方、「と考えられる」は判断の根拠がある場合の判断表現として使用するのが適当(○)だが、根拠がない場合でも使用可能(△)であるとし、確かな根拠がないが判断を下さざる得ない場合には主観による判断に近いので「と考える」を用いる、と述べている(p.68)。

医学・農学・工学論文では実験データ等を根拠に論文著者が判断をすることが多いので、(1)(2)のように「考えられる」が多く使用されている。

(1) 5年の観察期間における生存期間の中央値は5.1年であった。よって、MD療法は移植非適応患者の標準治療と考えられる。(『内科学会雑誌』2019年第108巻9)

(2) 浸炭過程でもコークスが消費されるが、浸炭もFeOとの反応と同様にコークス表面で進行するため、コークス強度に与える影響は小さいと考えられる。(『鉄と鋼』2010年96巻5号)

一方、文学作品の解釈・批評を行う文学論文では実験のデータ等の客観的な根拠がなく、論文著者の主観によって判断することがあり、そのような場合に(3)(4)のように「考える」が使用されている。

(3) 検討にあたっては、作品における臍の緒切りの場面の構成、そして、歴史における臍の緒切りという儀礼、という二方面への目配りが必要と考える。(『中世文学』2022年67巻)

(4) 鳥居論文は仮面というモチーフと密接にかかわる系のうちに「幼虫」も数えいれている。が、本論では、「幼虫」「青虫」「芋虫」の系列は、仮面のモチーフと切れたところがあると考える。(『昭和文学研究』2023年87巻)

ただし、表 2 で見るように論文著者の思考を表す表現として、古典日本文学を研究対象とする『中世文学』では「考える」37.6件であるのに対して、「考えられる等」は38.4件であり、「考えられる等」が「考える」をやや上回っている。古典日本文学研究では、文学作品が、誰によって書かれたものなのか(誰の手によって書き写されたものなのか)、いつ成立したものかなど典拠を調査することも研究の対象となる。典拠の調査は実証的な研究であり、根拠を示す必要があるとされるため、このような場合に(9)のように判断の根拠を伴って「考えられる」が使用されているのであろう。

(5) 『御室五十首』は建久九年一二月以降正治元年三月以前に成立したとされているので、集成立の最大下限は正治元年春と考えられる。(『中世文学』2019年64巻)

4.2 「考えられる」と「思われる」

表 2 で見るように文学論文における論文著者の「思われる等」が 16.2 件使用されており、

¹佐藤・仁科(1997)は根拠を提示しているケースを「根拠明示」と「根拠示唆」(「...てあり」「...ており」などの連用中止形)に分けている。さらに「根拠明示」を「根拠強調型」(「...ことから」「...ので」「...により」「...のように」)、「判断強調型」(「したがって」「よって」「ゆえに」「すなわち」「以上(のこと)から」)に分けている(p.65)。

「考えられる等」の 20.9 件よりも少ないものの、医学・農学・工学論文における論文著者の「思われる等」の使用件数 4.9 件の約 3 倍である。また、現代日本文学を研究対象とする『昭和文学研究』では「考えられる等」の 9.3 件よりも「思われる等」の 12.1 件のほうが多く使用されている。

佐藤・仁科（1997）は、「思われる」は主観性が強いことに加え、「思われる」には「考えられる」と同様に可能と自発の二つの意味があるものの、「思われる」は可能の意味が希薄であるために明確な根拠に基づく判断を表す表現としては使いにくく、工学系論文では使用例が少ないことを指摘している（p.69）。

医学・農学・工学論文では実験データ等という根拠に基づいて論文著者が判断をするため、「思われる」の使用例が少ないのである。一方、文学論文では実験データ等のような明確な根拠はないが「作品中の人物や作品の著者はこのように思っているのかもしれない」のように解釈・批評をすることもあるため、「思われる」が使用されることもあるのだろう。

また、長島（1979）は「思う」と「考える」の違いとして、「思う」は「＜直覚的＞＜情緒的＞判断」であるのに対し、「考える」は「＜知力を働かせた＞結果の＜論理的＞判断」であるとしている（p.111）。

文学研究では文学作品中の人物や文学作品の著者がどのように思考しているかを解釈・批評するが、作品中の人物や作品の著者は論理的に「考える」こともあれば、直感的、情緒的に「思う」こともあり、論文著者が解釈・批評する際に「考えられる」だけではなく「思われる」を使うことがあるのだろう。

また『昭和文学研究』で「思われる等」が「考えられる等」よりも多く使用されているのも、現代日本文学研究では典拠の調査研究が含まれる古典日本文学研究以上に作品の人物や著者の思考の解釈・批評の比重が高くなるからではないだろうか。

以下、文学論文における論文著者の思考を表す際に「思われる」が使用される用例として、判断の根拠を伴う(6)と判断の根拠を伴わない(7)を示す。

(6) 兼実は、維盛の振る舞いや美貌については以前にも書き留めており、兼実の関心を惹いていたと思われるが、「定能卿記」同日条には青海波に対して特に感想はない。（『中世文学』2010年 55 巻）

(7) 洪水のように身体を圧倒する情動たちを、「僕」のものではない情動として「断片化」することなしに、差別や暴力が常態化する「日常」を〈生存〉することはとうとうできなかった—このことをたしかに本小説は示しているものと思われる。（『昭和文学研究』2023年 86 巻）

5. 引用文献の人物・著者の思考を表す思考動詞の使用状況

2 「文学論文と医学・農学・工学論文における思考動詞の使用状況の調査方法」で述べたように、直接引用の部分は調査の対象外であり、間接引用の部分における引用文献の人物や著者の思考を表すものが調査の対象である。

表 2 で見るように、文学論文では引用文献中の人物・著者の思考を表す「考える」が 6.4 件である。また「思う」の使用件数総数 6.1 件のうち、62.5%を占める 4.0 件が引用文献中の人物・著者の思考を表している。一方、医学・農学・工学論文では引用文献の著者等の

思考を表す「思う」が 0.2 件、「考える」が 1.1 件である²。

(8)研究対象となっている作品中の人物の、(9)は研究対象となっている作品の著者の思考を表している。

(8) だからこそ「自分」は、自らの視覚にもとづく女の生という判断を確信することができず、「どうしても死ぬのかな」と思うのである。(『昭和文学研究』2023年85巻)

(9) 西行が厳しく教導したのは、それこそが往生への道だと考えていたからだろう。(『中世文学』2021年66号)

文学作品に登場する人物や文学作品の著者がどのように思考しているのかを解釈・批評することが文学研究において重要である。そのため、(8)(9)のように作品の人物や著者の思考を表す表現として「思う」「考える」が使用されるのである。

6. まとめ

本研究では J-stage 収録の文学論文における「思う」「思われる等」「考える」「考えられる等」について、研究方法が対照的な医学・農学・工学論文との比較を通して考察した。

医学・農学・工学論文では主として「考えられる等」が使用されている。一方、文学論文では「考える」が多用され、「考えられる等」「思われる等」も使用され、また文学作品中の人物の思考を表す際に「思う」「考える」が使用されていることが分かった。

アカデミック・ライティング教育では、客観的な根拠に基づき著者が判断する「考えられる」が推奨されているが、これは医学・農学・工学分野のような実験研究を想定したものであり、文学分野のような文学作品の解釈・批評を想定したものではないのであろう。研究方法の違いによって思考動詞の使用にも違いが生じてくることはアカデミック・ライティング教育を行う上で踏まえておく必要があると考える。

本研究は文学論文として『中世文学』『昭和文学研究』、医学論文として『日本内科学会雑誌』、農学論文として『化学と生物』、工学論文として『鉄と鋼』を調査対象とし、また「思う」「思われる等」「考える」「考えられる等」に限定している。調査対象とする論文の種類を広げ、また「思う」「思われる等」「考える」「考えられる等」以外の思考動詞についても分析をしていく必要があると考える。

参考文献

- 石黒圭 (2012) . 『新版論文・レポートの基本』, 日本実業出版社.
- 伊集院郁子・高野愛子 (2020) . 『日本語を学ぶ人のためのアカデミック・ライティング講座』, アスク出版.
- 川端元子 (2013) . 「大学生のレポートの出現する「思う」と「考える」の機能について—伝達の側面から見た問題点—」『愛知工業大学研究報告』48号, pp.77-84.
- 小森万里・三井久美子 (2016) . 『レポート・論文を書くための日本語文法』, くろしお出版.
- 佐藤勢紀子・仁科浩美 (1997) . 「工学系学術論文にみる「と考えられる」の機能」『日本語教育』93号, pp.61-71
- 杉田くに子 (1997) . 「学術論文における思考判断を表す文末表現の用法—「と思う」と

² 医学・農学・工学論文で引用文献(先行研究)の著者の思考を表す際に、「考える」「思う」以外にどのような表現が使用されているのかについては本研究では調査していない。

- 「と考える」を中心にしてー』『言語文化』34号, pp. 105-112.
- 長島善郎 (1979) .「オモウ・カンガエル」柴田武編『ことばの意味2 辞書に書いていない言葉』平凡社, pp.104-112.
- 向坂卓也 (2019) .「学術論文における接続詞「だから」の使用」『日語偏誤与日語教学研究』4, pp.172-188
- 向坂卓也 (2023) .「学術論文と論説文における「だから」の使用の比較」『言語資源ワークショップ 2022 発表論文集』, pp.375-385

関連 URL

J-stage 国立研究開発法人科学技術振興機構 <https://www.jstage.jst.go.jp/>